



愛隣幼稚園.....

園だより

.....14 夏休み号

戦わないという戦い

「ノーベル平和賞の候補に日本国憲法第9条がノミネート」このニュースを聞いたのは今年の春のことでした。ノーベル平和賞は世界平和に貢献した人物に対して授与されるものだと思い込んでいた私は、想定外のことに少し驚き、同時に、この国の向かっている方向に感じていた不安が薄らぎ、希望が見えたような思いになりました。しかし、平和憲法と言われるこの憲法の解釈を内閣が決めてしまうという事態が、つい先日現実のものとなってしまいました。私の不安はまた大きくなりました。

さて、憲法9条がノーベル平和賞にノミネートされた知らせを聞いた4月、幼稚園は新しい仲間を迎え、一つずつ大きくなった子どもたちはそれぞれに期待や不安を持ちながら新しい年度をスタートしました。集団生活が始まったばかりのたたんぼ組は、毎日どこかで誰かが叩いたり叩かれたり。自分の思いが通らないという苛立ち、それを相手に伝える平和的な手段(言語)を持たない、あるいは持っているもうまく使えないという苛立ちの果てに、「なんだこの、わからずや！(心の声です)ぱちっ」「お前こそ！（これも心の声です）ぱちっ」「いたい～（泣く）」「○○ちゃんがたいた～（泣く）」おおよそ平和からはほど遠い日々のできごとです。そこに大人(先生)が関わります。いつも自分の思いが通せるわけではないこと、相手にも思いがあること、言葉で伝えること、聴くこと、我慢すること、折り合いをつけること。繰り返し、繰り返し伝えます。やがて、叩いたり叩かれたりしなくても気持ちが伝えられて、自分も相手も少しずつ我慢して、受け入れたり、受け入れてもらったりしながら折り合いをつけられるようになっていきます。すると、痛い思いをしなくても「なあんだ、うまくいくじゃないか！」「しかも、それって気分がいい！」ということになっていくのです。叩かなくていいし、叩かれなくてすむ上に、前よりずっと楽しいという経験を子どもたちがちょうど今、積み重ねているのです。この経験はばら組でも、大きい組になっても積み重ねられていきます。気が付くと、そこには大人の仲介はなく、子どもたちが子どもたち同士で、実に平和的に紛争を回避し、建設的な解決策を見出していく姿があります。武力行使の必要はありません。これは幼児期の子どもたちに当たり前にも獲得して欲しいと願う、発達課題です。愛隣幼稚園が特別なことをしているわけではありません。だから子どもたちは誰もが、人と人の間に起こる様々な問題は、平和的に解決できるということを知っているのです。にも拘らず、何故、大人にはその発想がなくなってしまうのでしょうか？大人の事情も国際問題もそんなに単純ではないのだから・・・という声が聞こえてきます。しかし、大人は子どもたちよりももっと高度な議論ができるはずなのです。“人の命を奪ってはならない、殺してはいけない。いかなる理由があろうとも。”これが大原則です。暴力を用いて自己の主張を貫くとき(例えそれが相手からの先制攻撃に対抗するものであったとしても)、そのダメージは一瞬の静寂を生み、あたかも平和がもたらされたかのような錯覚を私たちに起こさせます。しかし想像力を働かせましょう。愛する故郷や愛する人がその時奪われていたとしたら、そこには新たな憎悪が生まれ、それは次の暴力へと繋がっていくのです。終わりのない負の連鎖が始まります。断ち切らなければなりません。いや、むしろ始めなければいいのです。“武力をもって戦わない、という戦い”を私たちは選択できるのです。

私たちは願っています。子どもたちの未来が平和であるようにと。我が子が殺されるのは耐えがたいことですが、それと同じように、我が子が誰かの命を奪うことも耐え難い悲しみです。だから私たちは伝えていかなければなりません。昔、この国も“戦争”をしたこと、それがどれほど人を傷つけ、悲しませたかということ。私たちの幸せも見知らぬ誰かの幸せも、暴力(戦争)によって踏みにじられてはならないのです。権力者に「NO!」ということすらできなかったあの時代ではないのです。子どもたちの未来のために私たちの願いを小さいけれど声にしたいと思います。愛隣幼稚園は「戦争は嫌いです!」と言い続けていきます。